

【氏名】石坂 晋哉

【所属大学院】（助成決定時）京都大学大学院アジア・アフリカ地域研究研究科

【研究題目】

ダム反対から地域再生へ―北インドのテーリー・ダム反対運動と地域社会

【研究の目的】

本研究の目的は、北インド・ウッタラーカンド地方におけるテーリー・ダム反対運動（1978―）が、特に2005年のテーリー・ダム貯水開始後、地域社会の再生に向けてどのような役割を果たしているか／果たせずにいるかについてフィールドワークを通じて明らかにすることである。

インドを代表する反ダム運動のひとつであるテーリー・ダム反対運動について、先行研究では、運動のローカルな性格が強調されてきた。それに対し私はこれまで、この運動がグローバルな「新しい社会運動」と共通する性格をもっていると同時に、インド独立運動の遺産としてのガーンディー主義の思想と実践から強い影響を受けたものでもあることを明確にしてきた。

本研究においてはさらに、テーリー水没という新たな局面において、運動が地域社会の再生という課題にいかに取り組んでいるかについて、リアルタイムで調査・分析を行う。

【研究の内容・方法】

本研究は、テーリー・ダム反対運動によってもたらされる地域社会の変容を、主に人々の意識や生活実践の変容というレベルから具体的に捉えようとするものである。そのために、北インド・ウッタラーカンド地方テーリー周辺での現地調査を行い、参与観察、インタビュー、オーラルヒストリー収集などの手法を駆使して調査・分析を行った。またインド在住の研究者との研究交流や、インド各地でテーリー・ダム反対運動と連携をとってきた活動家へのインタビュー、公文書館や各種図書館等における文献調査なども行った。

現地調査では、運動に一貫して積極的に参加した人だけでなく、さらに、運動に共感しながらも積極的には参加しなかった人や運動に関心なかった人、運動に反発あるいは運動を批判していた人などさまざまな人に接触し、運動が地域社会にもたらしたインパクトについて多角的に把握することをめざした。また運動は1992年以降、ひとりひとりのライフスタイルを地域の環境にできるだけ負荷をかけないものへと変えていこうとする自己変革の契機を含みもつものになったが、そうした側面が地域再生の動きへとつながっているかどうかといった点について具体的に検証した。さらに、2005年のテーリー水没が人々に与えた心理的・社会的影響についても分析を行った。立ち退き民たちの生活環境は概して厳しいが、そのなかでもテーリー・ダム反対運動の活動家など数人が中心となって生活上のさまざまな問題について互いに相談するネットワークが生まれていたため、そうした場での議論に参加して、人々がいかなる課題を抱えそれらをいかに乗り越えようとしているかを把握することを試みた。また、文献調査としては、デリーのインディラ・ガーンディー国立博物館・図書館でテーリー・ダム反対運動の法廷闘争関連の資料を収集するなどした。

## 【結論・考察】

テーリーの町からの立ち退き民が多く住む新都市ニューテーリーには、ダム建設工事関係の移住者なども多く居住しており、生活習慣や言葉が異なる両者の間では日常生活のレベルにおいてあまり接触はない。また立ち退き民自体もまとまっておらず、反ダム運動へのコミットメントの度合いや補償交渉などをめぐっては相互に反目している状況すら存在していた。このようにニューテーリーは全体として社会的分断状況にあった。運動はこれまでのところ、そうした状況の改善や生活環境改善などに向けての目立った貢献をし得てはいなかった。

しかしテーリー周辺の村落部においては、テーリー・ダム反対運動に関わった草の根のキーパーソンたちによって、新たな運動が始められていた。例えばヘーンワル溪谷のカーリー村を中心として、土着の多様な種子を保存し生かしていくことをめざす「種子を救え運動」など、地域の農業問題に取り組む運動が展開されていた。